

高橋誠一郎著 『「竜馬」という日本人 司馬遼太郎が描いたこと』
人文書館、2009年

中川 久嗣

江戸時代末期つまり幕末から明治維新にかけての時代は、言うまでもなく、日本という国にとってまさしく歴史的な大転換期であった。それはこの国の「外」の世界が、圧倒的なリアリティーとして怒濤のごとく押し寄せてきた、いわば文明の大転換期であった。それまでのこの国の「内」の世界は（もちろんその「内」こそがこの世界のほとんどすべてであったわけだが）、三百年にもわたる徳川幕藩体制のもと、さまざまな矛盾を含みながらも、いわば長い「惰眠」をむさぼってきた。その惰眠は、上から下まで張り巡らされた身分制度、半ば形式的な儀礼ばかりに汲々とするようになった幕府と藩の政治、本当に大切なことについては誰も責任を持とうとせず、体制の維持のためだけに体制を維持するという硬直化したこの国のすみずみにまで広がっていたかのごとくである。ある意味で平和とも言えるこうした惰眠状態は、「黒船来航」という「外」からの衝撃によって吹き飛んでしまった。「外」からの圧力という「挑戦」に対して、いかに「応戦」すべきか。この国のその後の歴史は、この「応戦」の手探りの試行錯誤と混乱をへて、明治国家の確立へと突き進んでゆくことになる。そうした「応戦」を担った人々の中で、ひとときわ明るい光を放ち、その後も長く人々の記憶に残ることになった存在、それが坂本竜馬という人物であった。

この著作『「竜馬」という日本人 司馬遼太郎が描いたこと』は、司馬遼太郎の時代小説『竜馬がゆく』（1962～1966）を中心に、司馬の目を通して見られた竜馬という人間の生き方と激動する幕末の日本社会の姿について、詳細かつ的確にたどり考察を加えることによって、竜馬をはじめこの時代に活躍した人々の内に見られる「日本人」像に迫り、さらにそこから著者（高橋氏）独自の「日本」と「世界」についての文明論的考察を展開しようとする作品である。この著作の構成は以下の通りである。

- 序 物語のはじまり — 竜馬という“奇蹟”
- 第一章 幕末の風雲 — 竜馬は生きている。
- 第二章 “黒船”というグローバリズム — 「開国」か「攘夷」か
- 第三章 竜馬という存在 — 桂浜の月を追って
- 第四章 「日本人」の誕生 — 竜馬と勝海舟との出会い
- 第五章 「文明」の灯をともし — “おれは死なぬ。”
- 第六章 “理想への坂”をのぼる — 竜馬の国民像
- 第七章 竜馬の「大勇」 — 二十一世紀への視野

第一章では、竜馬が十九歳で江戸の北辰一刀流千葉道場での修行へ旅立つところから、二十歳の時に二つ年上の桂小五郎と出会い、生涯の盟友になるとの誓いを交わすまでが考察される。関ヶ原ののち山内家が入国して以来、上士・郷士の差別が残る土佐という「辺境」から「中心」である江戸へ向かう竜馬には、その江戸さえも越えてさらに海の彼方の世界へと広がってゆく大きなまなざしがあったという。しかもその竜馬のまなざしには、作者である司馬自身の思想が重ねられて描かれているということが、司馬のさまざまな作品への言及とともに、私たちの前に明らかにされてゆく。江戸で修行を続けるちょうどそのときに、「黒船」が現れた（1853年）。黒船は、竜馬のまなざしをまさしく海の向こうの「他者」——すなわち「世界」へと向けさせてゆく。同じようなまなざしを持つ桂小五郎との出会いは、その後の日本の変革という大きな激流の中へと竜馬を巻き込んでゆく予感を熱く感じさせるものであった。

第二章では、司馬の『世に棲む日日』における吉田松陰の生い立ちから始められる。松陰は長州の「青い海」の光景に育まれて成長し、のちの竜馬と同じように、海の向こうの「世界」へと思いを馳せていた。吉田松陰はその後、東北への旅ののち、やはり「黒船」来航に遭遇する。松陰が試みたのは米艦に乗り込んで密航を企てることであった。密航が失敗し、萩の野山獄の監禁されてから「松下村塾」を開いて多くの若者たちを育てるまで、著者の高橋氏は松陰の女性観などにも触れながら、彼の人間としての生き様を生き生きと浮かび上がらせる。そして司馬とともに、松陰の持っていた「普遍性への飛翔」の可能性を指摘するのである。司馬の言うように、確かにそれは松陰においては開花するには至らなかったかも知れないが、高橋氏はその可能性をより肯定的にとらえようとしている。そこには竜馬に脈々と流れ続く「世界」へのまなざしが存在しているのである。またこの章では、ロシアという国と西欧や日本との関わりについて、高橋氏の比較文明論的な考察が展開されていることにも注目したい。

第三章では、まず最初にジョン万次郎ら江戸後期以来存在した日本人の漂流民の経験が取り上げられる。高橋氏によれば、漂流民が日本文明の形成に一定の役割を果たしていたことは、司馬も注目するところであった。海の彼方の世界が幕末の日本の歴史に及ぼした影響は絶大であるが、漂流民という形でその世界を実際に経験した人々の存在は、司馬の作品のあちこちに描かれている。一方、坂本竜馬は、みずから「時代の荒波へと漕ぎ出して」いった人間であった。竜馬は土佐で次第に名が知られるようになっていったが、そうした過程で中岡慎太郎や岩崎弥太郎らとの出会いがあり、また旅が竜馬の人間形成に大きな役割を果たしたこと、さらにオランダ憲法などの「洋学」に触発されたことなどが考察されてゆく。

第四章で語られるのは、竜馬の土佐藩脱藩と勝海舟との出会いである。世界との遭遇がもたらした竜馬の思想は、日本という小さな国の、さらにその辺境である土佐という枠組みの中にはもはや収まりきれないエネルギーを持つに至っていた。これまでになくスケールの大きくなった竜馬という「日本人」を理解し、受け止めることが出来たのは、これもまたやはり「日本第一の人物」たる勝海舟ならでのことであった。勝は、竜馬が土佐の小ささに失

望したのと同様、世襲システムと古い政治体制で硬直化したこの国のこれまでのあり方に絶望していた。この二人の「日本人」の出会い、まさしく歴史的な事件であったと言える。高橋氏は、こうした出会いの意義をあらためて鮮やかな形で私たちの前に示そうとしている。勝の弟子となった竜馬は「勝大学」で学び、そして勝を通して活躍のスケールをますます広げてゆくのである。

第五章では、いよいよ風雲急を告げ、幕末の激動が始まる。薩長などの尊皇攘夷勢力が朝廷をも巻き込みながら、幕府なきあとの時勢をうかがい始めるようになる。竜馬は勝や松平春嶽らの支援を得て神戸に海軍学校（海軍塾）を設立しようとしている。また新撰組にも命を狙われたりしている。ところで長州藩の外国船への攻撃について語る司馬について、高橋氏はトインビーの比較文明論を紹介しながら、それが西欧の自己中心的な戦争思想を相対化させているのにほかならないとしている。世界という他者に常に目を向けようとする竜馬や勝海舟の人間性を考察する高橋氏の視点も、彼らと同様に、世界という他者を視野に入れて歴史分析を行おうとする比較文明論的な立場に立ったものなのである。さらにこの章では、八月十八日の政変から蛤御門の変（禁門の変）などをへて長州が攘夷から倒幕へと転身してゆくプロセスが考察されている。

第六章では長州藩と薩摩藩の二つの立場からみた蛤御門の変についての考察から始まり、勝海舟と西郷吉之助（隆盛）の出会いをへて、さらに竜馬と西郷の出会いへと話が進んでゆく。竜馬は勝の助言を受けて薩摩にも出かけている。この章は前半が薩摩を中心に語られ、後半は長州の動向が考察されてゆく。長州の動向とはすなわち、高杉晋作らを中心とした蜂起から第二次長州征伐にかけての流れである。このふたつの歴史の流れは、竜馬を介して薩長同盟（1866年1月）という形で結びつき、歴史の本流を生み出してゆくことになった。藩という小さな枠組みを超えて、本当の意味での日本の「国」と日本の「国民」を作ろうとした坂本竜馬の姿は、まさしく真の「日本人」という言葉に相応しいものであった。しかし時代はその真の「日本人」の出現を許してはくれなかった。第七章では、一度襲撃されるという経験をした後、第二次長州征伐終了後の1867年12月に、竜馬が京都近江屋で暗殺されるまでの流れがたどられてゆく。徳川幕府に対する大政奉還案実現の画策と、薩長による倒幕の動きのせめぎ合いの中で、竜馬の人生は最後の輝きを放っている。その輝きの中に、高橋氏は、司馬とともに竜馬の思想の深さとエネルギーを読み取ろうとする。そこには竜馬の時代を見通す力と、物事を合理的に考えて動かしてゆこうとする冷静な思考力、そして同時にそれを周囲の多くの人間たちに訴えてゆこうとする熱い情熱が一体となって、まるで歴史の激流を突き動かしているかのごとくである。迫り来る内戦を避け、既存の諸勢力を糾合して「外」の世界に対峙し、それと対等に向き合いながらこの国とこの国の国民を育ててゆくこと。しかも単純かつ自己中心的な視野の狭い「閉ざされた」愛国精神などではない、もっと「開かれた」愛国精神をもってそれを目指すこと。竜馬の生き様と思想は、幕末のみならず、今日の世界にあっても、私たちにこれからの進むべき道を示してくれているのではあるまいか。

高橋誠一郎氏のこの著作は、以上のような内容を持つものであるが、それは司馬の『竜馬

がゆく』の単なる解説でもなければ、坂本竜馬の波乱の人生の歩みをたどっただけというものでもない。これまで司馬に関する著作をいくつも世に問うてきた著者ならでは、司馬の文学・歴史的世界についての豊かな知識をもって、竜馬と幕末～明治期の日本の歩みを有機的に結びつけて私たちの目の前に展開するその手腕は、鮮やかであり見事なものであると言わなければならない。竜馬の人生の歩みをたどりながら、私たちは司馬の描くこの時代の日本の置かれたさまざまな政治的・文化的諸状況を多角的に知ることが出来る。しかもその「多角的」ということには、著者である高橋氏自身のうちに常に強く意識されているグローバルな視点、あるいは「比較文明論」的な大きなスケールの問題意識が貫徹されている。要するに、幕末から明治期における日本の大転換と、そしてその動きの中で生き、その中で「日本人」として自らの信じる生きざまを貫こうとした坂本竜馬という存在こそは、まさしく世界的な視野をもって捉えることが必要な「文明」の問題にはかならないのである。著者は竜馬という「日本人」の生きざまを追い続けようとしたが、あるいは竜馬とは、「日本人」をさらに超えた「世界人」としての生きざまの体現者であったのかも知れない。